

# 聖少女

川 崎 清

## 1

川浪博は高校二年生になり、図書委員会に入った。川浪には文化系委員会に所属する予定はなかったが、三年女子の青山<sup>めぐみ</sup>愛が図書委員会の委員長であることを生徒会新聞で知り、高二の四月から委員会に参加する気になったのだ。青山に注目したのは、青山が学校内で比較的目立つ女子生徒だったからである。昨年十月の生徒総会で制服廃止問題を議論したとき、挙手をして制服廃止案にただ一人<sup>ひとり</sup>反対意見を述べたのも青山だった。その折、川浪はしどろもどろではあったが、いちやく青山支持の意見を表明したのである。以来、特にことばを交わすことはなかったが、互いに相手が誰か分かる状態で新学年の四月を迎えたのである。

## 2

六月下旬になった。川浪が委員会に参加して二か月半が経過し、川浪と青山は委員会活動日の火木土のうち土曜日は一緒に下校して学校の最寄り駅まで歩くことも多くなっていった。青山は学校の最寄り駅から三つ先の駅がある町に住んでおり、そこから自転車通学をしていた。学校からの帰路はその最寄り駅までいき、そこから線路沿いの道を青山の町まで帰るので、電車通学の川浪に同行しても特に不都合はなかったからである。

その日も青山と川浪は一緒に下校することにした。川浪が今回は青山の住む町の駅まで歩くと言うと、それなら青山も自転車を引いて同行すると言ったのだ。二人がいつもより長い道のりを途中まで歩くと、薄曇りであった空があっという間に厚い雨雲に覆われて、まだ午後三時なのに夜のような空に変わり、今にも雨が降りだしそうになった。

案の定ポツッとくると、たちまち大粒の雨がザーッと落ちてきて、雨音以外は何も聞こえない土砂降りになった。二人は交替で自転車を引きながら小走りして雨宿りできそうな軒下のあつた家を探した。しかし適当な民家はなく、ずぶ濡れになってしまった。仕方なく道沿いにあつた神社の境内に駆け込み、その中央にある大きな<sup>いちよう</sup>銀杏の木の下に入り、雨を避けた。

「わーっ、びしょ濡れになっちゃったね。俺が歩いて帰ろうなんて言ったんで、青山さんまで巻き込んだじゃった。自転車で帰れば降る前に家に着いてたよね」

「そうね。でも、私、もともと雨の音を聞いているのは好きなの。家の中で静かな雨の音を聞いていると心が落ち着くわ。でもやっぱりこの土砂降りの音はほんとにすごいわね。いまみたいに全身が濡れてしまったときにしか聞けない音だわ。こういう雨音もけっこうすてきね」

「すてきってというか、面白い。こんなに濡れちゃうと雨も嫌じゃないよ。俺、なんかウキウキしちゃって、かえって思っきり雨と遊びたくなった」

川浪も青山も自然の猛威にあおられて、若い体に潜む野性を刺激されていた。<sup>あまあし</sup>雨脚はますます強くなり、空も真っ暗になった。西の空にピカッと稲妻が走り、ゴロゴロッと雷が鳴った。またピカッと空の中央が大きく光った。直後にバリバリバリッと天地を割るような雷鳴がとどろいた。青山はキャッと悲鳴をあげて川浪にしがみついた。雷鳴が鳴り終わるとすぐに体を離れた。

「あっ、ごめん。こんなすごい雷なんだもん、怖くて思わず川浪君にしがみつっちゃった。川浪君の体ってとってもあったかいのね。熱いって言ったほうがいいくらい」

青山が両手で川浪の肩口をつかみ自分の上体を川浪の背中にピタッと着けたとき、川浪は男とは異なる体の感触を感じた。それはとても不思議な感触で、経験したことのないこちよい感覚であった。川浪の五感<sup>ごかん</sup>は青山と一緒にいることを意識して研ぎ澄まされていたので、触れ合いはほんの一瞬の出来事であったが、その瞬時の感触をつぶさに確認することができた。

「えっ、青山さんだってとってもあったかいよ。俺の熱じゃなくて青山さんが自分の熱を感じたんじゃない」

「私は寒いくらいよ。こんなにずぶ濡れになったなんて久しぶり。川浪君もびっしょり濡れてるけど、寒そうじゃないわね、やっぱり体が熱いからじゃない」

川浪は青山を見た。髪の毛が雨で濡れて額に張り付いていた。着ている制服の白のブラウスもピッタリと体についていて、下着の肩紐などが透けて見えた。その視線に気が付いたのか、青山も川浪の全身を見ながら言った。

「川浪君、服が濡れたままで電車に乗るわけにはいかないでしょ。私の家、すぐ近くだから寄ってって。少しでも乾かしていくといいわ。この時間は家に誰もいないから気をつかわなくていいのよ。私も早く帰って着替えたいし」

「えっ、いいよ。このまま帰るよ」

川浪は家に寄るように言われるとは思っていなかったので、やや驚いていた。

「遠慮しなくていいのよ。紅茶くらい入れるから、飲んであったまってる」

川浪はいきなり人の家に行くのは行儀がよくないと知っていたが、青山が寄れと言ってくれたのと、青山の私生活への興味もあり、ことばに従うことにした。

「ありがとう。それじゃ、ワイシャツを少し乾かす時間だけ寄らせてもらうね。何もしなくていいからね」

「もちろん、何もしないわ。もともと人を呼んでおもてなしができるような家じゃないの。ものが散らかっててごたごたしているわよ」

### 3

五分ほど歩くと、青山の家に着いた。<sup>まさき</sup>柁の生垣で囲まれた敷地に、板を重ねて打ち付けただけの粗末な造りの平屋が立っていた。青山は自転車を門内に止め、玄関を開けて中に入り、川浪にも入るように促した。

「川浪君、中に入って玄関で少し待っててね。私、お風呂場で着替えちゃうから」

そう言って青山は奥にあるらしい風呂場に行った。しばらくすると、普段着に着替えてタオルで髪を拭きながら家の上がり口に戻ってきた。

「川浪君、それじゃ部屋に上がって。そして向こうにあるお風呂場で体を拭いてきて。タオルはこれを使ってちょうだい。着替えは私のスモックを着ることで我慢してね。半袖シャツやズボンは風に当たるようにお風呂の外の軒下につるしておいて。後で私がアイロンかけるから」

川浪はせめて体育着を持っていれればと思った。体育着は所属する剣道部の部屋に置いておく習慣なので、家に持ち帰ることはなく、このときも下着の代わりになる体育着を持ち合わせていないので困っていた。

「俺、着替えがないから、紅茶飲んで、体をあたためるだけでいいよ」

「川浪君、濡れたパンツなんか穿いたままだとおなか冷えちゃうわよ。恥ずかしがってないで、脱いじゃって」

「エーッ、それは不公平だよ。青山さんだけちゃんと全部着てるなんて」

青山は不平を言う川浪をからかうようにクスクス笑いながら言い返した。

「川浪君、今なんかおかしいこと言ったわよ。私だけ全部着てると不公平って、変じゃない。それじゃ私が川浪君と同じ恰好をすれば公平になるっていうの」

「そんなこと言ってないよ。なんか青山さん誤解してる。俺だけパンツはかないなんて……」

「いいから早く濡れた体を拭いてきて」

川浪は気恥ずかしい思いでいたが、長い時間言い合う問題でもないので、しぶしぶ風呂場に入った。そして裸になりタオルで体の水気を拭くと、青山から渡されたスモックをかぶり、もと居た部屋に戻った。川浪のスモック姿を見ると、青山はまたクスクス笑いながら言った。

「川浪君、おなかすいてない？私、おなかペコペコになっちゃった。チキンラーメン作るから、一緒に食べましょうよ。その方が紅茶よりいいでしょ。あったまるし」

川浪は腹もすいていたが、自分から目を離してもらいたい一心で同意した。というのも、丈が膝上までしかないスモック姿で自分だけパンツもはかずに青山と向き合っているのが恥ずかしかったからだ。

青山は川浪のいる部屋と続киになった台所に移り、鍋をガスレンジにかけて点火した。沸騰するまでの間に、長ネギを刻み薬味を作って手際よく調理をすすめた。十五分ほどしてラーメンを二つのどんぶりに入れ、刻んだネギをたっぷり盛り付けて川浪のところに運んできた。

「お待ちせー、できたわよー。じゃ食べましょ。胡椒もあるから、お好みで入れてね」

丸い小さな食卓を挟んで二人は向かい合った。川浪はスモックの中が見えないかと不安で、膝がしらをきちんと合わせて畳の上に正座した。青山はラーメンのどんぶりを川浪と自分の前に据え、自分も正座した。とてもよいにおいがして、川浪は大いに食欲をそそられた。一口二口と食べると、即席ラーメンとは思えないうまい味が口の中に広がった。

「すごくおいしいね。店で食べるラーメンと同じだよ。いや、なんかそれよりうまい。お世辞じゃないよ。本当においしい」

「川浪君にそんなにおいしそうに食べてもらえると、作り甲斐があったわ。たとえお世辞でもうれしい。即席ラーメンって、お湯をかけて三分待つだけだと、やっぱりそれなりの味しかないのよね。でも鍋でちゃんと麺をゆでてネギを入れると、ぐんと美味しくなるの」

川浪はラーメンを食べながら何を話すべきか考えていたが、とりあえず今の疑問を口にした。

「青山さんはこのスモックどんなときに着るの？」

「それはね、私が髪の毛を切るときにかぶるのよ。切った毛が服についたりしないようにね」

「髪の毛は自分で切るの？」

「今は自分で切ってるわ。父が生きてるときは、よく父が切ってくれたの。母も切ってくれたけど、父の方が多かったわね。面白がって切るんだけど、なんか父の方がセンスがあるのね」

川浪は青山の家が母子家庭であることを知っていたが、話が亡くなった父親に触れることになったので、済まない気になった。二人ともラーメンを食べ終えたので、話題を変えようとしたが、青山が先に話し始めた。

#### 4

「ラーメンなんかでごめんね。それに散らかったひどい家<sup>うち</sup>で恥ずかしいけど、これが私の家なの」

「ラーメンとってもおいしかった。それに俺んちも同じだよ。狭い家だからあちこち物を置くんで家の中はめっちゃめっちゃだよ」

川浪の家はことば通りのもので、川浪は感じたままを言ったのだった。青山は話の続きを語り始めた。

「父が病気で亡くなってから、生活が苦しくて母はとても苦労したわ。病気の期間が長くて、治療にずいぶんとお金を使ったらしいの。だから母は本当に大変だった。でも父が死んで二年もしないうちにパート先で知りあった男の人と付き合うようになって、その男の人が家<sup>うち</sup>に来るようになったの。あれっと思ってたら、ひと月も経たないうちにその人が家に居ついて一緒に暮らすようになった」

川浪は制服廃止を議論した一年前の生徒総会の後で先輩から聞いた話を思い起こしていた。青山<sup>めぐみ</sup>愛は小学生時代に父親を病気で亡くし、母子家庭の苦しい家計の中で高校に進学した。それ故、制服が廃止になると、私服を何着も買って通学する余裕はないので、制服廃止に反対したという話であった。生徒総会の場にいた生徒たちは、生活に必要な金銭や学費のことなど何も考えなくてもよい者たちだった。そのような場で、青山はただ一人手を挙げて制服廃止に反対だと理路整然と発言していたのだ。川浪はあのときの青山の気持ちに改めて思いを巡らせていた。

青山は話を続けた。

「私も小学六年生になってたし、家が食べていだけで苦しいのはわかってたわ。でも、母と一緒に私にもできることは全部やって手伝えば、暮らしていけると考えてたの。だから母が男の人を家に入れることまでして、生活を楽にしようとするにはとても嫌<sup>いや</sup>な気がした。本

当に嫌だった。でも母の様子を見ると、笑顔を見せるようにもなったし、声も明るくなっていた。だから、生きていくには、これも仕方ないことなのかと自分を納得させて暮らそうと思ったの」

川浪は、小学六年生の女子が突然家の中に入り込んできた血のつながらない男との関係に戸惑う気持ちを思い、胸が痛むのを覚えた。

青山の話は更に続いた。

「その男は籍を入れて母と正式に結婚することはしないの。母子家庭だと児童扶養手当が子供が十八歳になるまでもらえるけど、結婚して両親がいるとその手当がもらえなくなるからっていうのよ。そんな程度の男なら相手にしないで、母はもっときちんと責任をとる人と付き合い方がいいのに……そう思ってあだし血の出るほど唇を噛んだ日はずいぶんあったわ」

川浪は青山が成長するにつれて、母親のとった行動が許せなくなり、母親との心理的距離がだんだんへだたっていく様子がよくわかる気がした。

「その男は家の助けになることなど何もしないの。ただ母に食事を作らせ、お酒を飲んでもらうだけ。くだらないテレビを見て大笑いしたりするだけなの。なんで母がこんな男と一緒にいたいのか全然理解できなかった。私が中学三年生のときだけど、その男はそれまで洗濯機に手を触れたことなんかなかったくせに、洗濯機の中をのぞいて洗い物をいじっていた。何をしてるのか最初はわかんなかったわ。でもひらめいた。私の下着を探してるんだってひらめいたの。私はその男とは必要なこと以外は口をきかなかったんだけど、そのときは『何してんの』ってきつい声で言ったのよ。そしたら、その男はビクッとしてきまり悪そうに黙って洗濯機から離れたわ」

川浪は青山の家庭の立ち入った事情をこのまま聞いていていいのか心配になった。青山が顔をしかめて息をするのも苦しそうに見えたからだ。何か言うべきかと迷ったが、何を言えばいいのかわからなかった。すると青山が息を深く吸い込み、一語一語噛みしめるように話の続きを語り始めた。

「私はこの世で一番けがらわしい生き物を見た気がしたの。そして私の洗濯物を急いで取り出して自分の部屋に入って戸を閉めた。あんなうす汚い男と一緒に住むなんてもう絶対できない、そう思って母がパートから帰るのを待っていた。母が帰ってくると、すぐに母のところに行行って、あの男のしてたことを言いつけたの。そしたら、そしたら……」

青山はそこで声を詰まらせ、先を言えなくなった。川浪はなんとか青山の心を落ち着かせようとして思い付いたことばを吐いた。

「青山さん、いま全部言わなくてもいいよ。言えるときに話してくれれば、俺聴くから」

青山は荒い呼吸をしながら右手のこぶしを口にあてて下を向いて震えていた。そして、しばらくしてから絞りだすように言った。

「母は顔を引きつらせ、まるで他人を見るような目で私を見て、『このバカッ』って言って、いきなり私の頬ぺたをひっぱたいた。私、何が起こったのか分からなかった。痛みは感じた

はずだけど、痛いって言うのも忘れて呆然と母の顔を見ていた……」

川浪は青山<sup>めぐみ</sup>愛とその母親との間に起こった葛藤の意味を何となく理解できる気がした。それだけに青山の心がとても深く傷ついたらろうと想像がついた。学校で見る青山は図書室にある本を片っ端から読んでしまう読書好きで、勉強もよくできる生徒だった。しかし、家庭では母親からもこんな理不尽な扱いを受けているのかと思うと、川浪は青山の心情に深く同情した。

川浪は青山の顔を見て話を聴いていたが、その顔の輪郭が一瞬<sup>にじ</sup>滲んだ。再び青山の顔がはっきり見えるようになると、青山はいつもの澄んだ瞳で川浪を見つめていた。そして今までの苦しそうな震え声ではなく、柔らかいなだめるような声で言った。

「川浪君がそんな悲しい顔してくれるんだもん、私が泣くつもりだったのに泣けなくなっちゃったじゃない。でも嬉しい。自分が泣くよりずっと心が晴れたわ。川浪君って、すごく心がやさしいのね」

青山は食卓の向こうから膝で立ってにじり寄り、川浪の目にうっすらと滲んでいる涙を両手の親指でそっとぬぐった。川浪は青山のその行為ではじめて自分が涙を流しそうになっていたことを知った。

青山もそのとき川浪が青山の心の辛さを自分の心の痛みとして心底<sup>しんぞこ</sup>深く受け止めてくれたと感じ、二人の魂が触れ合い、気持が通いあったと思ったのであった。

川浪は、しかし、青山を慰める適切なことばを思いつかなかった。感じるままに言うしかなかった。

「だって、父親づらしている偽善者にそんな嫌なことをされたのに、それを母親に言ったら、母親が青山さんの頬っぺたをひっぱたくなんてひどすぎるよ。可哀そすぎる。だから青山さんがどんなに哀しい気持になったか……それを思ったんだ。俺、母親にたたかれたことなんて一度もないんだよ。俺だったら母親にたたかれたら今だって泣いちゃうかもしれない」

「川浪君のお母さんて、やさしいのね。たたいたりしたことがないなんて、理想のお母さんじゃない。でも、私の母もそれまでは私をたたいたことなんてなかった。だから私もびっくりして泣けなかったの。泣かなかったんじゃないのよ。私って、父は病気で失ったけど、母はそのときに私の心の中で死んだんだわ。それもこれも、あの不潔な男のせいだって思った。そして、もう私は絶対この家を出ていくしかないって」

「青山さんって強いね。家を出て、そして自分で生きようって決心するんだから。俺だったら、やけくそになって自分を傷つけちゃうかもしれない。高いところから跳び降りたり、電車に飛び込んで死んでやるっ、なんて無茶苦茶なことしか考えられないよ」

「そういうことを考えたこともあったわ。でも、それって一番してはいけないことなのね。そう気が付いたの。でも、そう気が付くまでにはいろいろあった。心がボロボロになって、どうしたらいいのかわからなくて、ある場所に行ってみたの。そしたら、そこでとてもいいお話を聞いたの」

青山はやっと気持が落ち着いたのか、普段の冷静な話しぶりになっていた。青山の深刻な話

を聞くうちに時間も一時間以上たっていて、川浪はそろそろ辞去すべきかと考えていた。

「青山さん、今日はありがとう。ラーメンおいしかったし、体もあったまった。青山さんの辛い経験も話してもらえて、すごく心に響いたし、俺、すべきことにもっときちんと向き合わなければいけないって反省できた。それじゃ、今日は帰るね」

## 5

川浪は風呂場にもどり、ロープにかけてある自分のズボンと半袖ワイシャツをとり、風呂場のタイルの上においた下着をとった。

「川浪君、ズボンと半袖シャツはぜんぜん乾いてないでしょ。アイロンかけたくらいじゃ乾かないよね。それじゃ、ちょっと待っててね」

そう言って青山は自分の部屋に入り、少ししてズボンと半袖シャツを持って出てきた。

「これ亡くなった父が着てたものなの。古いけど、濡れたものを着てるよりずっといいと思うわ。着てちょうだい」

川浪は、それらの衣類は青山が父の遺品として大切にしまっておいたものだろうと推察した。そう思うと、青山の好意が熱く胸にしみわたった。

「青山さん、お父さんが着ていた大切なものを、俺着られないよ。自分のズボンとシャツで大丈夫だから」

「いいのよ、もう古いものだし、こういう機会に役に立った方がとっといた甲斐があるわ。だからお願い、着てちょうだい」

川浪が青山からもらったビニールの袋に自分の濡れた衣類をまとめて入れると、青山はまた自室に下がった。川浪は青山の父親のズボンとシャツを身に付けた。下着なしで直接着ることに抵抗もあったが、敢えて口にしないことにした。

青山は自室から出てきて、自分の父親が着ていた衣服を身に付けた川浪の姿を見ると、驚いて目を見張った。

「川浪君にぴったりの大きさなのね……よかった。それに、そうして川浪君が立っていると、まるで父が生き返ってそこにいるみたい」

青山はじっと川浪の姿を見ていた。すると川浪には青山の両目に涙が盛り上ってくるのが分かった。その涙はすぐに目からあふれて左右の頬をつたった。時間が静かに流れていた。青山の目から新たな涙がこぼれ落ちるのを見て、川浪が声を掛けようと口を開きかけたとき、青山が寄ってきて、川浪の右胸にそっと顔を預け、川浪の両肩に軽く手を添えた。そして声を立てずに泣いた。呼吸をするたびに嗚咽をこらえようとする青山の肩と胸の動きが川浪の胸にも伝わってきた。

じっとしていると青山は川浪の肩から手を離し、両腕を川浪の脇の下から差し入れて川浪をしっかりと抱きしめた。そして声を漏らさずにまた泣いた。川浪と青山の呼吸の音しか聞こえなかった。ややあって青山が川浪の体にまわした両腕を解いて、顔を川浪の右胸から離れた。そして泣いた後のくぐもった声で少しきまり悪そうに言った。

「ごめんなさい……あんまり父の姿に似ていて、思いだしちゃったの」

「俺の方こそ、ごめんなさい。お父さんの着ていた大切なものを貸してもらって……きちんとクリーニングして返します」

「クリーニングなんて出さないでいいわよ。じゃ、これ濡れてる川浪君の衣類ね。駅まで送りましょうか」

「道は分かっているから、このまま帰ります。今日は本当にありがとう、本当に……じゃ、さようなら」

川浪は青山の家を出て、歩きながらいま経験したことを静かに振り返った。青山が自分の右胸に顔を預けて泣いているとき、青山の髪に手を添えて慰めるべきか川浪は迷っていた。更に青山が川浪の体に両腕をまわして抱きしめてきたとき、自分も青山をしっかりと抱きしめて、その悲しみを受け止めるべきか川浪は大いに迷っていた。川浪は青山愛を十分に好きであった。だから、あるとき青山の髪をなでて、青山の体をしっかりと抱きしめてもよかった。しかし、それがどうしてもできなかったのだ。それは心の底で、青山が示した親愛の情は川浪に向けられたものではなく、亡くなった父親に対して向けられたものだと思ったからだ。川浪はただ立っただけであった。何かできたとしても、絶対にするべきではなかった、何もしなくてよかったのだ、そう川浪は自分に言い聞かせた。

## 6

川浪は青山から借りた衣類を母親に頼んで洗濯してもらい、アイロンをかけて、きれいに畳んでもらった。そしてそれをデパートの包装紙に包み、翌週の火曜日にある図書委員会のときに青山に返した。川浪自身の感謝と好意を示すためアーモンドチョコレート一箱も添えた。他の委員もいたので、先週の出来事の話は一切せずに、委員会の議論に淡々と加わった。

川浪は剣道部にも所属していたので、その日は図書委員会を途中で抜けて剣道場に行った。剣道場といっても、普通の体育館をバレーボール部、バスケット部、柔道部、卓球部と交代で週二回使用しているにすぎない。体育館が使えない日はグラウンドを走り込む基礎体力運動をするのが部活内容であった。また、川浪は剣道部所属と言っても、出たり出なかつたり幽霊部員だった。剣道場では剣道部内で仲のよい同学年の近藤良夫が練習をしていた。川浪を見ると、声を掛けてきた。

「川浪、近頃あまり顔をださないな。鍛えてやるから速く防具をつけろ」

川浪は剣道に熱心な近藤にはいつも借りがあるような気がしていた。それで剣道着に着替えて準備体操をし、竹刀の素振りを五分ほどしてから防具をつけた。そして近藤と向き合った。まず相手の防具の頭部を打つ「面打ち」をして、相手の竹刀を自分の竹刀で左右から打ち合わせる「切り返し」という練習を十本した。この基本練習が川浪は好きだった。一心に竹刀を打ち合わせていると心技体が一体となる感覚を味わえるからだった。久しぶりにその感覚に浸っていると、近藤が言った。

「川浪、腕の力だけで打つな。体全体の力が竹刀に乗るように姿勢を正して竹刀を振るんだ」



近藤の指摘は的確だった。幽霊部員の川浪はただ腕で竹刀を振り回すだけになりがちだが、そのことを剣道二段の近藤はよく分かっていた。小一時間ほどの練習を終えて部室に下がると、近藤が尋ねてきた。

「川浪、この頃は一年のとき同級生だった松村みどりとうまくいってるのか？前はよく二人で駅まで歩いてたじゃないか。男女二人ってのはけっこう目立ったぞ」

「示し合わせて二人で一緒に帰ったことは案外少ないんだ。目立ってたんだろね。でも分かるよ。俺も二人で下校している連中を見ると、けっこう注目しちゃうもんな」

「それで、松村とはなんかあったのか」

「何もない。松村は医者の娘で一人っ子なんだ。医者の跡継ぎを期待されてるらしい。だから医学部の受験準備でこれから大変そうなんだよ」

近藤は早く核心を言えとばかりに、じれったそうな顔をして訊いてきた。

「何もないって、なんにもしてないってことか」

川浪は近藤が言わんとしていることが分かっていた。だが下品な言い方をして松村みどりをけが汚したくなかった。

「なんか期待してるみたいだけど、松村とは話をしただけだよ。それもメンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲ホ短調がどうか、カデンツァがどうかね。分かるだろ、こういう話題が多くて俺はついていけないんだよ。読書会をするとか、制服廃止とか、そういう話題のときには俺もいろいろ言ったけど」

「付き合いは今でも続いているんだろ。この頃一緒のところはあまり目にしないけど」

「松村は勉強で忙しいんだ。だから俺、邪魔したくないって思ってあまり会わないようにしてる。二年になってクラスも違っちゃったし、このままいくと会えば挨拶するだけになっちゃうだろうな」

「それでいいのか。俺が見てると、いつも松村の方から川浪に話しかけてたように見えただけど。だから川浪がその気になれば松村は今でも落ちるよ」

川浪は近藤の言い方が下品になってきたので、少し語気を強めて言った。

「近藤、『落ちる』なんて言うなよ。そんなお前らの思ってるようなことはしないんだよ。ゲスな想像すんなよ」

ややムキになって川浪が言い返したので、近藤はけお気圧されていた。そして川浪が松村との付き合いをまじめに考えていることを理解した。

「わかった。気イ悪くさせたんなら、すまん。お前が女といちゃついて、やらしいことをしないのはわかってるよ」

少し気まずい空気になったが、なんとかこの話はここで打ち切り、別れて下校した。一人で歩きながら、川浪は考えていた。松村みどりとは一年のとき学級委員として互いに協力しあい、打ち解けて話し合える関係になったけれど、松村は音楽の話についてこられない自分を退屈に感じているだろう、だからこの関係は自然に解消されるのがいいのだろうと。そうなれば松村

の受験勉強の邪魔をしないことにもなる……そのように自分を納得させた。

## 7

木曜日の午後に川浪は図書室の奥にある委員会室に行った。部屋には青山がいるだけで、他の図書委員はいなかった。それで先週世話になったことの礼をやっと青山に直接伝えることができた。

「先週の土曜日はひどい雷雨に巻き込まれて、ごめんね。青山さん家にも連れてって来て、お父さんの大切な服も貸してもらって本当にありがとう。俺のおふくろも感謝してた。おふくろからのお礼も伝えてくれと言われたよ」

実を言えば、川浪は自分の母親には一年上級の女子の家に行って、そこでラーメンをごちそうになり、着替えまで貸してもらったとは話していなかった。剣道部仲間の近藤の家に行ったことにしていたのだ。川浪にしてみれば、思いを寄せる女子生徒の話を家庭ですることは照れくさくてできなかったのだ。

「ほんと、ひどい雨だったわね。あんなにびしょ濡れになったのって、やっぱり最近はなかったわ」と青山は明るく応じた。

川浪は青山の重く暗い身の上話を聞いたことや、そのことで自分が涙を流しそうになったこと、そして青山も泣かずにはいられなかったことを二人だけの秘密と感じていた。そして、それを今に至るまで口にはできなかったことで、かえって秘密を共有している気持ちが深まり、二人の距離が近づいたような気がしていた。

すると青山が川浪の顔を見て言った。

「突然こんな質問して変に思うでしょうけど、川浪君の家はうちは仏教なの神道なの？」

「お彼岸のときはお寺にお墓参りに行くし、お祭りのときは近くにある諏訪神社に行くね。七五三のときは明治神宮に行ったかな。要するに何でもいいみたい」

「うちもそうなんだけど、実は母とのことがあってから、中学三年生だった私は誰にも相談できなくて悩んでいたの。そのとき中学の図書室で借りた『聖書物語』のことを思い出したのね。それは聖書のお話を子供にもわかりやく解説した本で、とても面白かったから憶えていたの」

川浪は宗教と聞くと最近嫌悪感を催すことが多かった。しばしば暴かれる宗教者の醜聞にうんざりしていたからだ。でもそれを口にするとうちの青山の話の腰を折ることになるので次のように返した。

「それなら俺も漫画で見たことあるよ。海が真っ二つに割れたりするんだよね」

「それはとても有名なお話だわ。そういう驚くような奇蹟の話はほかにもたくさんあるのね。でも私は『聖書物語』の中では、イエス様を産んだマリア様のお話が一番心を惹かれたの」

イエス、マリアと聞くと川浪は反発したくなるが多かった。いわゆる西洋かぶれの人間が嫌いだったからだ。しかし、言っているのが青山であり、青山が身を置いて耐えている痛ましい現実を聞かされていたので、反発をおぼえるよりも、なぜマリアに惹かれたのか、そのことに興味をそそられた。素直な気持ちから、思った疑問を口にした。

「宗教って、非科学的な話を信じなければいけないのは分かるんだけど、マリアがイエス・キリストの母親になるいきさつって、一番非科学的で信じられない話じゃなかった？」

「マリア様のことになると、みんなそのことを言いたてるわ。川浪君が信じないことは理解できるし、信じてってお願いもしない。でも、私には受け入れられる話なの。だって、神様を身籠るんだから、普通の人と同じわけがないって思う」

川浪は、聡明で科学的思考を十分に駆使できる青山が聖書の奇蹟を簡単に受け入れていることに驚いた。しかし、彼女の苦しみが自分には想像もできないほど深く重いゆえに宗教に惹かれ、すがりたい気持ちになるのだろうと推察した。

青山は更に話を続けた。

「その本をもう一度借りて読み直し、マリア様のことをよく考えたのね。私にはマリア様が私を支えてくれるように思えたわ。その本の最後のページにいくつか教会の所在地が書いてあって、東京のは二つあったの。それで行きやすい方に自分で行って、そこにいる人にいろいろ教えてもらい、マリア様のことをもっと知りたいって思ったの」

「それで本当に行っちゃったんだ。青山さんらしいな、すごく行動的で。先週話したとき、ある場所に行ったら、いい話を聞けたって言ってたけど、教会で聞いたんだね」

川浪は青山が先週口にしたことをはっきりと憶えていた。辛い嫌な経験をしたとしても、自傷行為や自殺はしてはいけないと青山は言ったのだ。そのときのことを思い返していると、青山が川浪の目をまっすぐに見て言った。

「川浪君、今度の土曜日の午後はあいてる？ 私にお話をしてくれた神父さまの教会と一緒に行けたらいいなって、いま思い付いたんだけど。もちろんキリスト教に勧誘してるんじゃないわよ。『信じてっ』とか、絶対言わないから」

川浪は青山と一緒に出掛けようと誘われるとは思っていなかった。しかし、返事は反射的にしていた。

「うん、あいてる。青山さんで行くなら、いつもあいてるよ。寺でも神社でも教会でもどこでも行く」

「んもーっ、そういう言い方しないでっ。これ真面目な話なのよ。遊びで行くんじゃないの。なんていうか……心を浄めるって感じかな」

「分かった。じゃ土曜日、授業終わったら、一度自転車置き場に行くね。そこで会って時間を調整して行き違いのないようにしようよ。俺、それまでに心をきれいにしておくから」

「心はそこに行けば浄められるから、川浪君は特別な用意はなにもしなくていいわ」

話のまとまるのは速かった。段取りを決めた後、委員会の活動記録を二人で書いて、その日は別れた。

## 8

青山と教会に行く土曜日になった。四時間目の授業を終えて、川浪は自転車置き場に向かった。青山の自転車はハンドルの前の荷物籠に赤いリボンが結んであり、すぐに見分けがついた。

その前に立っていると、ほどなくして青山も鞆を持ってやってきた。

「じゃ、私は家に自転車を置いてから行くわ。川浪君はこのまま駅に行って、いつもの電車に乗っていて。三つ先の駅で落ち合いましょ」

「分かった。じゃ、先頭車両に乗ってる。青山さんがホームにいなければ、降りて待ってるから」

## 9

川浪と青山は電車を一度乗り換えて山手線の目白駅で降りた。青山は先に立って改札口を出た。

「目白駅から二十分くらい歩くとその教会に着くわ。この道路は目白通りっていうのよ。  
いちよう銀杏並木になってて静かな道でしょ、私、とても気に入ってるの」

川浪は制服を着て通学鞆を持ち、青山も制服のままトートバッグを持っただけなので、いかにも下校途中といった風情で二人は歩いて行った。

「川浪君、目白駅で降りたことはあるの？」

「これが初めて。山手線はよく乗るけど、新宿、渋谷、池袋で降りることがほとんどだからね。初めて降りる駅の町って面白いよね。降りると発見があるし。ここも降りたらすぐのところは川村学園と学習院大学が向かい合ってた。天皇陛下も皇太子も学習院だから、ここに来てたんだね。正門に門衛が何人もいて、いかめしい感じだった」

「大学はもう一つあるのよ。あと少し歩くと、日本女子大があるわ。平塚雷鳥って知ってる？ あっ、川浪君には高村智恵子の方が馴染みがあるかもしれないわね。とにかく、この二人が通った女子大なの」

「高村智恵子って、『智恵子抄』の人？ 高村光太郎の奥さんだっけ。現代国語で先生がなんかやけに力を込めて説明してたよ」

受験をひかえた高校生らしい話をしながら十五分ほど歩き、日本女子大学を過ぎたところで、川浪はのどの渴きをおぼえた。青山にもそのことを尋ねることにした。

「のど渴かない？ この通りには店がないから自動販売機でジュースでも買おうかと思うんだけど」

「私もそう思ったの。自動販売機ならさっき通り過ぎたわね。私もここに来るとき、飲み物が欲しくなるんだけど、目白通りにはお店がないのよ。少しもどるけど中嶋酒店というお店が一軒だけあったと思う。清涼飲料も売ってるから、そこで何か買いましょ」

二人は酒店のところまでもどった。そして飲み物を選ぶことになった。

「青山さんは何がいい？ 大き目の瓶入りのを買って、二人で飲むと安くつくよ。運動部の連中はみんなそうしてるんだ」

「でも、それって回し飲みするんじゃない」

「あっ、そうか。男同士ならいいけど。青山さん、俺とじゃヤダよね。ごめん、なんか俺、缶入りジュースじゃ足りないし、高くツクってことしか考えてなかった」

「いいわよ。川浪君となら。小さい缶入り飲料じゃ私でも量は足りないし、別々に買うと高くなるよね。それじゃ、瓶入りのキリンレモンにしようよ」

川浪は瓶入りキリンレモンを青山と二人で飲み回す成り行きになったことに、なんとなく済まない気がした。青山とは親しくなっているけれど、回し飲みを平然と強要できるほどではないと思っていたからだ。

キリンレモンを買って店の外に出ると、川浪はそれを持ったまま十数メートルも歩いて、しばらく飲もうとしなかった。それを見て、青山は言った。

「川浪君、早くして。のどがカラカラ」

「青山さん先に飲んでいいよ。俺その後で飲むから」

「川浪君先でいいわよ。そんなこと気にしてないから」

川浪は青山を見た。目が合うと、青山はにこやかに目を細めた。それで川浪は意を決してキリンレモンをごくごとと飲んだ。半分以上は飲まないように注意し、かなり残っていることを確かめてから、青山に瓶を渡した。青山はそれを受け取ると、ためらうことなく飲み口に口をつけてキリンレモンを川浪と同じようにごくごとと飲んだ。そして飲み終わると言った。

「あー、おいしい。キリンレモンって、こんなにおいしかったっけ」

川浪は青山が何のためらいもなく、川浪が口をつけた飲み口に自分の口をつけて清涼飲料を飲んだことにホッとした。同時に、その事実単なる水分補給以上の意味づけをして気持ちが高ぶるのを抑えることができなかった。

「川浪君、まだ少し残ってるから、飲んじゃって」

青山は瓶を川浪に返した。そう言われて川浪は返された瓶の口に自分の口をあてて、残りを飲み干した。青山の飲んだ後だと意識すると、飲み口に口をつけるとき唇に異様に注意が集中した。飲み物の味も最初に飲んだときよりなぜか格段にうまいと感じた。

それから十分ほど歩いて、とうとう二人は目的地に着いた。

## 10

教会の敷地に入ると、川浪は目の前に広がる光景にびっくりして叫んだ。

「うわーっ、すごい教会だ。思っていたのと全然違う。なんか漫画に出てくる宇宙基地みたいだね。この教会って大きな銀色の蝶が羽をたたんでるように見えるよ。真上から見ると星形ヒトデみたいなのかなー？」

青山は川浪が感嘆の声をあげるのが嬉しいらしく、説明する気持にも張りが出たようであった。

「私も教えてもらって憶えたんだけど、真上から見ると十字架の形なんですって。この教会は丹下健三という有名な建築家が設計して一九六四年にできたそうよ。建物の中がまたすごい。でも中に入る前に、向こうにある洞窟に案内するわ」

「えっ、洞窟なんてあるの？ここ目白だよ」

青山は先に立って、怪訝な様子<sup>げげん</sup>の川浪を敷地の奥まったところに連れて行った。そこには荒々

しい岩肌の小さな崖があり、その中央に洞穴の入り口のような窪んだ場所があった。右端に標識があり、「ルルドの洞窟」と書かれていた。その崖の右上方に小さい窪みがあり、その中に白い衣装をまとった女性像が立っていた。青山はその女性像に向かって十字をきり、頭を下げて祈った。それから川浪の方を向いて説明を始めた。

「あそこにいるのがマリア様。フランスのルルドという町の近くに洞窟があるの。農家の娘でベルナデッタという子がいて、その洞窟の前を通りかかったとき、マリア様が現れたのね。マリア様はその子に洞窟の入り口に万病に効く泉が湧くから飲むようになっておっしゃったの。ベルナデッタはここで見たことを早速町の教会にいる神父様に報告したんだけど、最初は相手にされなかったんですって。でも、治らないと言われた病人がその話を信じて、この泉を飲んだら、治ってしまったのね。それで評判になり、世界中からルルドの泉を求めて人が巡礼するようになったんですって。ここはその場所を正確にまねて造ってあるの。私もここに来て初めて知った話なんだけど、自分がベルナデッタになった気持になれたわ。だって私にもマリア様が見えるから」

川浪は青山の説明を聞きながら、青山が自分の母と、そして父と名乗る嫌な男との間で抱えている精神的葛藤の重苦しさに思いを巡らせた。彼女がここに来て自分をベルナデッタに擬えることでその重苦しさを少しでも軽減できればいいと願わざるを得なかった。幸い、説明している青山の表情は穏やかで声も弾んでいた。それを感じとり川浪は安堵した。しかし同時に痛ましい思いも募るのであった。また、川浪はここに来て、斬新で荘厳な教会建築を目にし、ルルドの奇蹟の話聞くうちに、自分も日常世界とは全く異なる聖なる空間に足を踏み入れたことを強く意識した。

青山は再び先に立って教会の入り口まで来ると川浪の方を振り返り、中に入るよう促した。

「川浪君、それじゃ教会に入りましょ」

川浪は青山の後に続いて教会の中に入った。中は薄暗く物が見えないので、堂内の大きさも広さも分からなかった。少しして目が暗さに慣れると、川浪は大きな驚きに打たれ、思わず声を発した。

「わーっ、宇宙の真ん中にいるみたい……天井がものすごく高いんだね。正面に大きな十字架が光ってる」

教会堂の中は高校の体育館三つ分以上の広さがあり、天井部分がちょうど朝顔の花を逆さにしたような形になっていた。だから天井を見上げると中心に吸い込まれるような感じになった。堂内の照明はほぼ自然光だけと言ってよく、その光も中央奥に屹立する十字架の背後の細長い窓から差すようになっていて、十字架そのものが神々しい光を放っているように見えた。川浪はその幻想的空間の雰囲気ですっかり圧倒され、心の底から魅了されてしまった。

青山は川浪の感嘆する様子に満足して、説明を続けた。

「この教会は十字架のある中央が東を向いてるの。だから十字架の後ろから差してくる光は太陽の光なのね。あの十字架は高さが十六メートル。天井が一番高いところで約四十メートル

もあるのよ。こんなに高いと本当に宇宙の中心を見てみたいね」

そう言うと青山は十字架のある中央祭壇の方に歩いていき、前後に整然と並んだ祈祷台の最前列のところで立ち止まった。川浪を手招きすると自分は祈祷台の中ほどに入り、膝置きに膝をついて十字をきった。

川浪は音を立てないように青山が祈りをささげている祈祷台まで歩いていき、横に立った。青山は両手の指を胸の高さで組み合わせ、頭を心持ち下げて一心に祈っていた。神との対話に専心し、信頼しきって祈る人の姿がこれほど美しく神々しいことを川浪は初めて知った。十字架の背後から差しこむ淡い外光に照らしだされ、青山の全身が聖性を帯びているように見えた。その清らかな横顔を見ていると、川浪は信仰の本質を理解できるような気になった。

青山が立ち上がると、川浪は尋ねた。

「何を祈っていたの？」

「いまここに生きていることに感謝していたの」

川浪にとっては意外な答えであった。祈りとは何かを願うことと思っていたからだ。重ねて訊いた。

「何かをお願いすることはしないの？」

「たまにあるけど、いつもは感謝するのよ。いま生きてこうしてお祈りできることに」

川浪は青山が気の滅入る環境に身を置きながら、運命を呪うことなく、なお神に感謝をささげていることに深い感銘を受けた。そのことを口にした。

「青山さんは辛いことが多いじゃない……家の中で。なんかお願いしてもいいんじゃない？」

「生きていれば、こうして川浪君と会ってお話もできるじゃない。それを感謝しなくちゃ」

青山は苦しいことをことばにするより、楽しいこと嬉しいことを数え上げて感謝しているのだと川浪は思った。信仰の奥義の一端を教えられた気がした。

## 11

青山は祈りを終えたからか、一層晴れやかになった顔を川浪に向けて、言った。

「向こうに素晴らしい彫刻があるの。見に行きましょうよ」

青山は川浪を中央祭壇から少し下がった右手にある側廊そくろうに案内した。そこは小さい部屋になっていて、大きな白い大理石の像が安置されていた。それは若い女性が平らな岩の上に腰を下ろし、自分の両膝の上に成人男性の遺骸を横たえて両腕で抱えている場面のようなようであった。

青山は言った。

「この像はミケランジェロが造ったのよ。ピエタという名前の像なの」

川浪は像の名前も作者は誰かも憶えていなかったが、この像は美術図鑑で見たことがあった。

「えっ、ミケランジェロ、あのダヴィデ像を作った人？」

「そう、あのミケランジェロ。ダヴィデ像は世界史の教科書で、ルネサンスのところに載ってたわよね。この像は十字架から降ろされたイエス様の亡骸なきがらを母親のマリア様が抱きしめて哀しみにくれている場面なの。私はこのピエタを見ると、どんな哀しみにも耐える力をいただけ

る気がする」

青山はピエタ像に正面から向き合いしばらく無言で見入っていた。川浪も青山の右横に立ち、像を見ていた。すると自分の左腕に人のぬくもりを感じた。青山がピエタを見る角度を変えるため少し移動して、その体が川浪の左腕に触れたのだった。川浪は自分も横に動こうとした。が、そのとき青山が川浪の背中に右腕をまわし、その動きを制するように右手を添えてきた。

「川浪君、マリア様がイエス様の右のあばら骨のところに右手を添えて、イエス様を抱えているでしょ、こんなふうに」

青山はマリアと同じ様に自分の右手を川浪の右脇に差し入れて自分の方に軽く引き寄せた。青山の体が川浪の体のそこそこに軽く触れて、青山の体温がじわっと伝わってきた。川浪は雷雨のとき、青山が雷鳴に驚いて自分にしがみついたときの感触を思い出した。あのときと同じ不思議なこちよい感触を川浪は感じた。自分とは違う性の体のぬくもりに<sup>しば</sup>暫し陶酔した。そのとき青山の声が聞こえた。

「イエス様の体を見て。マリア様の右手が添えられている下の方よ。そこに槍で突かれた傷口も彫られているの。イエス様はどんなに苦しかったか……想像しただけで気を失いそう……」

青山はことばを継げずに、自分の体を川浪の体につけたままピエタ像をじっと見ていた。川浪はこの時間ができるだけ長く続くようにと願った。が、すぐに青山は川浪の体にまわした腕を解いて体を元の位置に戻ってしまった。川浪も神聖な場所で神聖な彫像を見ていることを思い、浸った陶酔を振り払わなければいけないと気を引き締めた。そしてことばを發した。

「この像を見たとき、違和感でいうか、何かおかしいっていう感じがしたんだ。マリアが若すぎるって思った。だって、イエスの母親なのに、膝の上に横たわるイエスの方がずっと年上に見えるじゃない」

「よく見ているわね。さすがだわ。その点は昔からいろんな人が問題にしているらしいの。諸説あるんだけど、私は普通の聖母子像と同じって意見がいいと思う。マリア様が抱えているのは<sup>おきなご</sup>幼子のイエス様なのよ。幼子を両腕に抱いてるんだけど、マリア様には将来イエス様が人間全体の罪を背負って犠牲になられることが見えるのね。その未来のイエス様の姿を若い母のマリア様は見ているの。つまりピエタ像は予言なのね。違う説もあることを神父様に教えていただいたけれど、でも、好きな説を信じてピエタ像を見なさいって。だから私には幼子イエス様を抱いたマリア様に見える」

二人は数分間いろいろな位置からピエタを鑑賞した。続いて青山は中央祭壇に向かって左手の側廊にあるマリア祭壇に川浪を案内した。そこには既に二人の女性信者がいて瞑想をしていた。青山もマリア像の前に<sup>ひざまず</sup>跪いて瞑想の姿勢をとった。ここに来てから川浪は青山の祈る姿を何回も見ることになった。その度にその清純無垢<sup>むく</sup>な美しさに心を奪われざるを得なかった。

<sup>しば</sup>暫しの瞑想を終えると青山は川浪ににっこりとほほ笑んで言った。

「お待たせしました。今日は退屈しなかった？」



「退屈してる暇なんかなかったよ。いろいろすごいものがあって、見るもの聞くもの初めてのことばかりだもん。それに青山さんの真剣な祈りの姿に心を浄められた、本当に」

「よかったわ。私もここに来て心を浄めることができた。川浪君が同じように感じてくれて嬉しいわ。それじゃ、そろそろ帰りましょうか」

教会の敷地に入ってから一時間が経過していた。二人は教会堂の外に出て、外気を胸いっぱい吸い込んだ。川浪は振り返ってもう一度最初に案内されたルルドの洞窟を遠くに見ていた。すると青山が訊いてきた。

「川浪君、アーモンドチョコレート食べない？」

「チョコ？いいね、もらおうかな」

と川浪は応じた。青山はチョコの箱を探っていたが、困った、といった口調で言った。

「あっ、いま口に入れているのが最後のチョコだったわ。じゃ、川浪君、こっち向いて」

そう言われて川浪はルルドの洞窟から青山の方に顔を向けた。するとつま先立ちした青山の顔が既に目の前に迫<sup>せま</sup>ってきていて、アッと声を出す暇もなく、青山の唇が川浪の唇に触れて、チョコが口内に押し込まれた。川浪は嘔むこともできずに、押し込まれたアーモンドチョコを丸ごと飲み込んでしまった。青山はクスクス笑って言った。

「ごめんなさい、いま食べてたチョコが最後の一粒だったの。でも分かち合うことが教会の教えなのよ。だから川浪君にもあげたの」

川浪は唇に残るチョコの甘い香りを舌で味わうと、恥ずかしそうに青山に一応抗議した。

「びっくりした……これって、もしかして……」

「川浪君、気のまわしすぎよ、そんなんじゃないの。さっきキリンレモンを回し飲みしたじゃない。それと同じこと。瓶がないだけ。だって、口から出して、食べてっていう方がおかしいじゃない？」

「そりゃそうだけど……」

青山は川浪の目を見てにっこりして言った。

「チョコおいしかったでしょ」

川浪は青山と言い合うためにその目を見た。互いの視線が合うたびに青山はクスクスと笑った。

「飲み込んだから、分からないよ。でも唇に残ったチョコはなんかおいしかった」

こんな他愛のないやりとりで川浪は十分に幸せな気持ちになった。そして生きる喜びで心が満たされた。体全体が熱くなった。青山も同じように感じていて欲しいと切に願った。

## 12

川浪と青山は教会の門の外に出た。目白通りを目白駅の方角に歩こうとすると青山が言った。

「来たときは反対側の歩道を歩きましょうよ。途中で夢二画廊というのがあるの。竹久夢二の身内の人が経営してるらしいわ。ショーウィンドーを覗くだけなんだけど、飾ってある絵が違ってたりして毎回楽しみなの」

聖少女 (川崎 清)

そう言うと、青山はためらいもなく川浪の手を取って横断歩道を渡った。横断歩道を渡ってからも青山は絡めた指を川浪の手から解こうとはしなかった。二人は手をつないで帰路についた。川浪はやっと決心がついた。今度は自分から青山をこの教会に誘い、帰り道で自分の気持ちを伝えようと。

完

(2018.9.11 受理)